

no.3

CLC からしだね書店便り



3²⁰²¹
March

CLC からしだね書店では…

- 1 キリスト教書のほか、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もたくさん揃えたいと思います。
- 2 お洒落でかわいい雑貨や小物もあります。
- 3 ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチ等をご提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- 4 コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
- 5 図書コーナーも併設します。ドリンクを片手に、好きな本を手にとってお読みください。
- 6 古書の販売もする予定です。
- 7 読書会や著者を招いての講演会など、人と人が出会い、つながる「対話」の場を提供したいと考えています

読書感想本

読

みなさん、こんにちは
からしだね館のからしちゃんです。今回の読書感想本コーナーでご紹介するのは、いのちのこじ社から4月発行になった、ミッションからしだね理事長の森田「落ち穂を拾う」です。

「あなたがたの土地の収穫を刈り入れるときは、刈るときに畑の隅まで刈り尽くしてはならない。あなたの収穫の落ち穂も集めてはならない。貧しい人と寄留者のために、それらを残しておかなければならない。わたしはあなたがたの神、主である。」
レビ記23：22

福祉施設「からしだね館」を拠点にして、地域で暮らす障害者の支援をしてきました。こころの病氣、精神に障害のある方々の支援というのが私たちの主な働きです。

と言っても、人間の生活というのはそう単純なものではなく、障害者の抱える生活課題は、しばしば家族関係や子どもの問題でもあり、また経済、教育、生活環境の問題であったりします。課題のひとつひとつを辿って行くうちに、先が見えなくなり、いったい私たちは何をしているのだろうか？と暗澹たる思いに駆られることがあります。多くの場合、なかなか「出口」らしきものが見えないのです。

それでも、日々の働きの中で、ぼつりぼつりと灯りがともるような嬉しい出来事に出会うことができるのもこの仕事です。

いろいろな面で、生きづらい時代になってきた、とつくづく思います。

何十年に一度というような大災害が、日本でも毎年のようにやってきます。温暖化による地球規模の干ばつや異常気象。原因が人間による環境破壊だとすれば、その責任は重大です。大国は覇権を広げ、小さな国や民族は、自立や自由を脅かされています。

一部の力ある者は、ときに暴力的とも言えるほど、いとも簡単に国境を超えて富や情報を支配し、独占していきます。その一方で貧しい人々はますます貧しく、虐げられています。



「落ち穂を拾う」福祉と福音（坂岡隆司 著）
いのちのこじ社 1320円（税込）

る者はいよいよ窮地に追いやられていく。そんな時代に、私たちは生きています。

対立や分断、格差や差別、貧困や病気、そして孤立・・・社会にできたひずみは、もろくなった破れのように、徐々に引き裂かれていきます。とりわけ昨年来のコロナ禍によって、その破れはさらに大きくなってしまいました。深刻で複雑な、得体のしれない闇のような何かが、この社会の底には横たわっているような気がします。

「福祉」とは、そんな社会の「破れ」に立って、堂々と修復を試みることもなかもしれません。それは当てのない、そして終わることのない旅のようなものです。

破れの中で生きているのは、人間です。神の被造物たる価値高い存在として、一人ひとりが生きている。その時、聖書の語る「福音」と「福祉」はどこかで、どうしても交錯するように思われます。そんなことを考えながら、2年前、『百万人の福音』誌に「福祉と福音」を連載で書かせていただきました。本書は、その記事を中心にまとめたものです。

この2年の間に、からしだね館では、本来の障害者支援の枠を超えて様々なテーマに取り組んできました。その一つが、震災や豪雨など災害支援の現場に向き、現地で出会った被災地救援NGOの方々と協働して立ち上げた、「市民ソーシャルワーカー育成プロジェクト」です。これは、被災地支援の過程でこれまであまり丁寧

われてこなかった、被災者の「人間としての尊厳」を軸にした生活支援を、一般市民の力で、ボランティアでやっていこうという試みです。

また、本書でも少し触れましたが、今回のコロナ禍で経済的に「干上がった」（難民認定申請中の）在留外国人の方々に活躍の場を提供し、支援する側に立っていただくというプロジェクトもありました。これら一つひとつが、小さくはあっても、もう一つの「破れ口」に立とうとする試みであったと思います。

旧約聖書の中に、畑の落ち穂は、貧しい人々や寄留者のために残しておかなければならない、という神の命令が記されたところがあります。

じつは、これこそ、今の時代の私たちがこころして聴かなければならないメッセージなのかもしれません。

IT化がどんどん進み、極端なまでに世界がグローバル化し、市場原理はますます幅を利かせている、そんな今の時代です。多様な価値観や生き方は否定され、いつの間にか消えていく。異なるものどうし交わることがなく、社会の壁（ひだ）は無くなる。デジタル化が象徴するような、どこかのつべりした社会になってきました。成果や実績、効率やスピード、便利さや目の前の利益…それらがあまりにも強調され過ぎている、それは人間の尊厳とは何か相入れない世界です。

Epilogue - Gleaning

"When you reap the harvest of your land, do not reap to the very edges of your field or gather the gleanings of your harvest. Leave them for the poor and for the foreigner residing among you. I am the LORD your God." - Leviticus 23:22 (NIV)

Mission Karashidane is a social welfare cooperation that has been providing various kinds of support for people with disabilities in our community. Our mission is mainly aimed at helping people with mental disabilities.

In the world today, our lives are not simple but complicated. Life's problems include a range of issues, such as family relationships, child-rearing, economic situations, education and living environments. When we try to solve all these problems, we can often get lost and ask ourselves, "We are supposed to be helping them, but what are we actually doing? Why are we doing it? Where are we going?" Then, we can become so exhausted that we're not able to see the light to solve them. We're not able to find a way to resolve the situation. The daily grind can be difficult in our work with them but from time to time we experience a heartwarming interaction which brings light into our hearts.

I really feel that our world has been getting more and more difficult to live in. Every year we have had serious disasters which used to only occur every few decades. Climate change has brought about droughts and abnormal weather. If global warming has been caused by environmental destruction, then we are responsible for our part in it. Powerful countries are gaining more power and developing countries and minority groups are fighting for independence and freedom. When some people gain power, they try to strictly control the access to information to keep their power. On the other hand, poor people are becoming poorer and oppressed peoples' situations are becoming more perilous. We are living in such a difficult time.

Conflict and division, disparity and discrimination, poverty and illness, and isolation...the broken pieces of society continue to shatter. The corona virus crisis has expounded the brokenness. I feel like there is a severe, complicated, and strange darkness at work in the very foundation of our world.

Social welfare is the work that stands right in the brokenness and restores it little by little. This work is like an endless journey where there is no clear destination.

Who lives in the brokenness? It is us, humans. But I also believe that each person is a highly valuable creation of God. When I think about it, I really feel that the Good News and social welfare are interconnected. As I was contemplating this idea, I started writing a column for a Christian magazine called "The Good News for a Million People" which



落ち穂―それは、残す者にとっても拾う者にとっても、人が善く生きていくための知恵、神の豊かな祝福が隠されているもの。そこにはまた、福祉と福音が重なる何かがある。いま、そんなことを考えているところです。

前著『一粒のたねから』に続き、今回もいのちのことば社の米本円香さんに、ひとかたならぬお世話になりました。ここから心からの謝意を表します。

2021年早春

著者

<お知らせ>

- ◆教会や保育園、幼稚園等で、定期刊行物や新刊書、用品等のご注文をある程度まとめて頂きましたら、月1回、無料の定期便でお届けします。
- ◆お近くにキリスト教書店が無い場合など、ご希望により、新刊書や用品（グッズ）の訪問販売を検討させて頂きます。ご相談ください。
- ◆キリスト教古書を献本ください。特に絶版した良書をお求めています。必要な方に有料で提供したいと思います。古書の売り上げ利益は、からしだね館で働く障害者の工賃や困窮外国人支援のために使わせて頂きます。
- ◆再版発行のリクエストをお寄せください。絶版した良書で、再版してほしいものがありましたら、お知らせください。ある程度リクエストがまとまりましたら、出版社に情報提供したいと思います。

以前、教会学校のスタッフをしていた時のお話です。地域の子どもたちが来てくれるのは嬉しいのですが、対応するのも楽ではありません。会堂内でドリブルをしたり、講壇の上を走り回ったり、椅子から椅子へ跳び移ったり……。当然、大人は彼らを止めようとしていますが、場合によっては余計に反発されてしまうこともあります。大人のリードに従わず「勝手にこつちで遊んでようぜ」と笑い合っている彼らの姿は、まるで反抗すること自体を楽しんでいるかのようです。

こういう「やんちゃな子」が来たときに必ず話題になるのが、「しつけ」が必要だ、という意見です。「甘やかすからつけあがるんだ」「ダメなことはダメだと、厳しくガツンと言わなきゃ」「そうしないと悪いことと悪いことの区別がつかなくなる」。

なるほど、確かにそうかもしれません。一方で、「教会は子どもの居場所だ」「彼らには安心して過ごせる場所がないから、寛大に受け入れてあげよう」といった意見も出てきます。実際「反抗的な子や、挑発的にふるまう子から話を聞くと、かなり複雑な家庭事情を抱えている場合が多いのです」。

家庭が安心して暮らせる場所ではない。だから、そのストレスや鬱屈した感情を、安心できる場所で吐き出してしまおう。そういう事情もあるのでしょう。「しつけ派」から見れば、「受容派」は「甘やかし」



坂岡 大路
臨床心理士

1988年京都府生まれ。北海道大学大学院教育学院臨床心理学講座修士課程修了。訪問型フリースクールや、中学校、児童アライズサービスなどでのボランティア経験を経て、現在、札幌市内の児童精神科に勤務。臨床心理士、公認心理師。2019〜2021年『成長』（いのちのことば社）誌に「ころろで学ぶ教会学校」を連載。

に見えますし、「受容派」から見れば、「しつけ派」は「高圧的」（愛のない冷たい態度）に見えるわけです。

しかし、「しつけか、受容か」、「どこまでが甘やかして、どこまでが優しさか」というような単純な二項対立は、果たして建設的な議論と言えるでしょうか。何か見失われていることがあるように思えます。

それは、「その対応をした結果、子どもがどんな風になっていくか」という想像力かもしれません。私たちは、何を意図して子どもたちに関わり、何を学んでほしくてその対応をするのでしょうか。

あえて極端な例を出します。体罰でしつけられた子どもは、その体験から何を学ぶでしょうか。「怖い人がいる時だけ従うふりをしておこう。それが一番得だ」という学習をします。彼らは恐怖でしつけられていますから、「従わないと恐ろしいことになる」と思った時

ponders this connection. These articles have been compiled to create this new book.

We at Karashidane have been trying to work on various social issues the last two years. Sometimes we have to work outside of the typical social welfare framework. One such program is called the Citizen's Social Worker's Training Project that two disaster relief NGOs and Karashidane started together. The relationship between our three groups was formed after working alongside each other in disaster relief. After working in disaster relief, it seemed to me that Japanese society does not place a priority on protecting the human dignity of those affected by disasters. This new trial project is an attempt to help provide continuous living support from volunteer citizens based on the foundation of protecting human dignity. Another project that we have been working on that I talked about in my book is to provide job opportunities for foreigners who are applying for refugee status. These foreigners are not yet been granted residential rights because they are in the application process.

As a small organization, the scope of our ability to help is limited, but one thing we can do is stand in the brokenness. The Old Testament says that we are to leave the gleanings of the harvest for the poor and for the foreigners. This is the message that we need to listen to even today. In the world today, technology is steadily advancing, globalization is quickly progressing, and market principles are becoming the norm.

The diversity in values and various ways of living appear to be disappearing. People are living in communities that only share their own values and they are losing the unique character that comes with sharing life with people different from themselves. The effects of digitalization symbolizes the loss of this character. Our society has been getting flatter as the digitalization increases. In this digital age, things like outcome, performance, efficiency, speed, convenience, and benefits are emphasized. These values do not always factor in protecting human dignity.

In the process of gleaning, we see God's design to bless not only the person picking up the crops but also the person leaving the remains. In this concept of gleaning, we see both social welfare and the Good News intertwined. The areas where they overlap is what I am trying to explore in this book.

Madoka Yonemote from "Inochi no kotoba" has provided invaluable support not only in this book but also my previous book "One Single Tiny Seed." I would like to express my sincere gratitude for all of her support.



Sakaoka Takashi, Author
Gleaning - Social Welfare and The Good News
Early spring 2021

だけ従順になります。しかし、そうでない時は、まるでタガが外れたように、それまでためこんでいたフラストレーションを爆発させ、自己統制できなくなるのです。

ひょっとすると教会で暴れる子の中にも、恐怖でしつけられている子がいるかもしれません。恐怖による指導は即効性があり、すぐに言うことを聞かせられるので、「私はしっかりしつけをしているんだ」という大人の自己満足を生み出しやすいのです。しかし、長期的な視点で見た時に子どもの自律や社会性の向上につながっているかというと、疑問と言わざるを得ません。

では、「やりたい放題させておく」のがよい対応なのでしょう。想像力を働かせてみましょう。「何をやっても許容される」子どもはその体験から何を学ぶのか。彼らは「強く出れば、相手は屈服する」と思い、圧力や暴力で言うことを聞かせる手法を学びます。つまり、小さな暴君になるということです。

私たちは子どもに「どうやってほしくて」しつけるのでしょうか。「何のために」受容するのでしょうか。関わる目的がはっきりしなければ軸がぶれてしまい、対応に「貫性もなくなり、その都度の子どもの言動にただ振り回されるだけになってしまいます。

ではここで、私なりの答えを言ってみます。「しつけ」の目的とは「約束を守る力」を育むことです。(ちなみにこれは「絶対の正義」



ではありません。ぜひ皆さんにも吟味していただきたいと思っています。)

教会の子どもたちとゲームをしていた時、みんなが勝手なふるまいをし始めたことがありました。その時、ある子がこう言いました。「みんなそればかりで、つまらない!」
私たちは、誰もが自由に生きたい。だからこそルールが必要なのです。みんなで鬼ごっこをしている時、タッチされた子が「俺は鬼なんてやらない!」と言い出したらどうなるか。みんながそれをやったら、「鬼ごっこ」というゲームは崩壊し、結局みんな「つまらない」ことになります。



旧約聖書の時代、神はイスラエルという超問題児を「しつけ」ていました。彼らは「うなじのこわい民」と呼ばれる、とてつもなく我の強い民族だったので「殺してはならない」、「盗んではならない」、「偽証してはならない」……これらのルールは何のためにあるのでしょうか? 権力者が民から搾取するためでしょうか? 国家の秩序を維持するためでしょうか? そうではありません。民が「栄える」ためです(申命記29:9)。

このルールには、前文があります。ここに神さまのビジョンが示されています。「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連

れ出した、あなたの神、主である。」(出エジプト20:2) つまり、「神

の愛により、奴隷状態から解放され、自由になった」ということが前提です。この土台の上に、次のような命令が与えられます。

神に愛された者として、受け取ったものを隣人にも分け与える(申命記10:18、19)。自分を大切にし、隣人を大切にする(レビ19:34)。自分自身がかつてエジプトでは異邦人だったのだから、異邦人のことも尊重する(レビ19:34)。

つまり、出エジプト体験(神の愛による解放と自由)こそが、聖書で言う「ルールの土台」なのです。それを抜きにして、律法の精神は理解できません。イスラエル人は、自由になるために解放されました。だから、与えられたルールもまた「自由になるための」ルールです。

神は、人間に「約束したことを守れる人間」に、「自分を愛するように隣人を愛する人間」になってほしかった。そのために契約が与えられたのです。この点を忘れたとき、ルールは自己目的化し、律法主義となります。

イエスは言います。「安息日は人間のために設けられたのです。人間が安息日のために造られたものではありません」(マルコ2:27) ルールは、ルールのためにあるのではない。聖書によれば、ルールの存在意義は、私たちが自由になるため、また、お互いの存在を尊重し合えるようになるためです。



神の「しつけ」は、「しつけのためのしつけ」ではありません。そ

こには、明確な目的意識がありました。「自分を愛するように隣人を愛する」。「お互いの存在を認め合う」。そして、そのために「約束を守る」ことのできる人間になる。これが、神にとつての「しつけ」のビジョンです。

コミュニティのメンバーが自由になるために、また、楽しく平和に過ごすためにこそ、約束は必要なのです。逆に言えば、「ルールのためのルール」は課す側の自己満足にすぎず、本質を外しています。ルールとは、共存のための作法であり、異なる人間同士が共に生きていくために必要な制度だと言えます。

さて、重要なのは、以上のような理屈を「説いて聞かせる」ことではありません。「好き勝手にふるまってもつまらないし、かえって不自由になる」のだと、具体的な体験から学ばせることです。神もまた、「出エジプト」や「荒野の四十年」という体験学習によって、民を教育しました。

この「体験学習」を具体的にどのような実践していくのか、ということについてはまた次回お話ししたいと思います。



からしだね館のひとも —こころ病む人の支援—

からしだね館では、
あなただけの生活全般の障害の
を受けたり、就労支援
をしたりと、さまざま
—こころ病む人—



京都市東部障害者
地域生活支援センター
からしだねセンター主任
武山 世子子
(精神保健福祉士・
相談支援専門員)

今日は、こころの病により「自分への信頼」「他者への信頼」「社会への信頼」を失った人が、その喪失体験からとても大切なことを教えてくれたので、ぜひみなさんとお分かちしたいと思います。

今日の主人公を紹介します。土江はじめさんという男性です。彼は若年で統合失調症を発症し、40代半ばで亡くなるまでの20年近くを病との戦いの中で生きました。激しい妄想と幻聴から、自室の中であっても監視され、命をねらわれる恐怖に支配され、押し入れの中で護身用の包丁を枕の下に置いて眠り、ただひたすらその恐怖が過ぎ去るのを待つ日々でした。彼はそんな自分の病や彼の日常を、文章にし、訪問の度に私にそれを読ませてくれたのです。彼にとって、文章を書いている時だけが、幻聴から解放され、自分が生きていることを感じているようでした。それを1冊の本として出版することになった時、彼も、そして私も、これからの彼の将来が今までは全くことなる方向に動き始めるのではないか、そんな希望でいっぱいになりました。彼が書き遺した一部を紹介します。

たしかに、精神障害者にとつての障害とは、厄介なだけで、何の得にもならないものである。時には、人の心を殺してしまう恐ろしい存在でもある。
5年前、この町に暮らし始めたころのわたしは、今よりずっと瘦せていた。
心の病が、このわたしをマッチ棒に変えてしまっていた。恐怖感やパニックに火が点けば消えず、それが恐ろしくて、一人部屋に籠りっきりの暮らしをしていた。
わたしの頬を削っていたのは、若さではなかった10年前からほんの数年前まで、わたしの頬を削っていたのは心だった
病激しい精神症状がわたしの頬を削り、肋を浮かし、心は朽ちかけていた
今、わたしは多くの人たちに支えられ、支援を受けているわたしは、わたしの力の及ぶ限り、皆さんの声に応えていきたいと願っている
自己の障害と向き合うと書けば簡単だが
障害者はそれだけしていればいいものではない
やはりいつかは、自分の足で社会の土壌に立ち、感謝すべき人たちの声に応えなければならぬ
その日が来るか来ないかそれこそが、わたしに与えられている使命ではないか

大きく出たな、などと茶化されると弱いのだが
今のわたしは、ただ茫洋としているのではない、待っているのだ
何を待っているのか、自分にも分からないが
サーファーが波を待つように、わたしはわたしの波を待っているのだ

「心の声 たどりきた道 ある精神障害者の記録」より抜粋

彼のことがから私は「待つ」ということについて考えました。確かに、生前の彼はずっと「待って」いました。押し入れの中で、「死ね」「殺すぞ」という声がやむのを待っていました。
外に一歩も出られない生活の中で、数少ない安心できる人からの連絡をひたすら待っていました。
迷惑をかけっぱなしの母親に、元気で外出できる自分の姿を見せる日が来ることを待っていました。
思い通りにいかない人生をあきらめようとしている人に、いつか自分が「大丈夫」とメッセージを送る、そんな日を待っていました。



状況は望むようには好転しませんでした、彼はねばり強く待っていました。
あきらめず、投げ出さずに。

なぜ、これほど長い年月、厳しい状況の中にいながら待つことができたのでしょうか。
病や障害によって、芸術の道で食べていきたいという願いも、旅をしながらいろんな人に出会い、自分の知らない世界を知りたいという願いも、体調や生活面で家族に心配をかけない自分でいたいとの願いも喪いました。なのに、どうして待つことができたのでしょうか。
私は、こんな状況の中でも、彼がどこかに希望を抱いていたからではないのかと思うのです。この自分の喪失体験を、いつか同じような喪失状態にある人たちに届けたい、この使命こそが、彼に希望を与え、死の恐怖におびえる毎日の中であっても、文章を書くという作業を粛々と続けることを可能にしたのではないかと思います。

社会は「待つ」ことに十分な時間をくれないかもしれませんが、「待つ」ことに評価をくれないかもしれません。
からしだねでは、「待つ」ことを大切にします。「待つ」ことを支援します。「待つ」ことを励まします。「待つ」間の痛みを見守ります。
痛みや問題の中で粛々と自分の現実を生きながら、自分の波を待つ。
「待った」ことで自分の生きる道や、価値を見出した人によって、こんなことを教えられています。

障害のこと、福祉のことなど「こんなことを聞いてみたい」という人があれば、ぜひ、こちらからしだね書店 (cic@karashidane.or.jp) までお知らせください。

※書店入口すぐの棚…是非お求めくださいませ!!





◆中古本をお譲りいただけませんか？

ご家庭に眠っている古本がありませんか？よろしければぜひお譲りください。

恐れ入りますが、無料でお譲りいただけるとありがたいです。

当店中古図書部で管理し、必要とされる方に、有料でお譲りします。

生じた利益は、CLCからしだね書店で働く利用者の賃金に還元します。

なお、当書店では、古本の取り扱いができる、古物商許可を得ています。

(古物商許可 NO：京都府 611102130003 号)

詳しくは、お電話かメールでお問い合わせください。

*中古図書部は目下在庫整理中です。準備が整い次第お知らせします。

◆あなたも「おすすめ本スポンサー」になってみませんか？

あなたのイチ押しの本を、店に置かせていただきます。



「この本、ぜひ皆さんに読んでほしい」というあなたのお勧め本。

3か月間店頭に置いてみませんか？

残念ながら売れ残ってしまったら、ご自分で買い取ってお友達にプレゼント…という仕組みです。(書店に在庫をためこまず、皆さまの「推薦良書」を広くご紹介いただける。…そうになったらいいなと思っています。)

ただし、本の選定や店内配置等については、当店にお任せください。種類によっては、ご希望に沿えない場合もあります。

編集後記

■ 3月2日、予定通り、新装なったブックカフェがオープンしました。

再開を待っておいでくださった近所の方、通りがかりのお客様、法人関係者や新聞社の方々などなど。…雨模様の冷たい一日でしたが、静かに熱く、そしてちょっと華やかな店開きでした。

■ 開店を前に、2月26日夜、開店記念礼拝の時をもちました。礼拝では、第1コリント12章より、「互いにいたわり合うためです」と題して、奥村拓也WEC(世界福音伝道会)理事長(洛西キリスト教会牧師)が幸いなメッセージを語ってくださいました。あらためて、この働きの尊さと重さが身に沁みました。



編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援A・B型事業所からしだねワークス
からしだね書店&カフェ・トライアングル

〒607-8216 京都市山科区勸修寺東出町75 からしだね館
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025
書店メール clc@karashidane.or.jp